

INDEX 2 科学研究費助成事業採択結果／香港中文大との連携講座 3 海外留学プログラムの実施状況／留学体験談 4 キャリアを考えるイベント開催／第78回ソフィア祭

2024年度 9月期学位授与式・秋学期入学式

9月20日に2024年度9月期学位授与式が、翌21日に2024年度秋学期入学式が父母、保証人参列のもと行われた。来場できない卒業生、新入生、父母、保証人にはYouTubeから式の模様が同時配信された。

外国語を話す学生が多く国際色豊かな2つの式は、英語研究会(ESS)の学生が司会を務め、すべて英語で執り行われた。

■9月期学位授与式

式はアントニウス・フィルマンシャー神父(カトリック・イエズス会センター)の祝福で始まり、マルコによる福音書9章30節、33節から37節が朗読された。

曄道佳明学長は式辞で「入学時の到達目標や学びの動機を思い返したとき、その志に充分応える学びが完遂できましたか。満点の回答を私は期待しません。偉大なリーダーの目標には、単に達成されるべき数字が並ぶだけでなく、理念に基づく自身の、あるいは社会の展望が色濃くあらわれ、その追い求める姿は常に新たな、高貴なものに変遷していくものだからです。そして、これからそれぞれの役割を全うする中で、ぜひその耳を、目を、心を、立場の弱い人にも向けることを忘れな

いでいてください」と述べ、卒業生を激励した。学位取得者は、博士後期課程(博士)13人(特例による課程博士2人を含む)、博士前期課程(修士)73人、学部(学士)200人。出席した博士全員と、博士前期課程各研究科および各学部の代表学生に曄道学長から学位記が授与された。

サリ・アガスティン理事長、上智大学ソフィア会会長の鳥居正男氏の祝辞に続き、卒業生を代表して葛西華さん(理工学部物質生命理工学科 グリーンサイエンスコース)が登壇して謝辞を述べた。

最後は、混成合唱団アマデウスコール、グリークラブと共に校歌を斉唱し閉式した。

■秋学期入学式

国際教養学部のほか、Sophia Program for Sustainable Futures (SPSF)、理工英語コースなど、英語のみで学位が取得できる学部学科や研究科に今秋入学した正規生は235人(再入学者4人を含む)。うち145人は外国籍の新入生であった。

式はフィルマンシャー神父の祝福で始まり、マタイによる福音書9章9節から13節が朗読された。曄道学長の式辞に続いて、新入生代表のエリゼン



さまざまな国籍の学生を迎え2024年度秋学期入学式を挙行了した

ダ・サンナさん(総合人間科学部教育学科 SPSF)が登壇し入学への抱負を述べた。

アガスティン理事長は祝辞で、かつて本学の学生や教職員が経済的な理由から教育を受ける余裕のない発展途国の子どものために奨学金を立ち上げたエピソードを、本学の教育精神を象徴する価値観の一つとして紹介し、「上智大学は『他者のために、他者とともに』という教育精神に基づき、高等教育こそ高度な学術的卓越性を獲得する

ための全人格的な成長を促すという信念のもとに設立されました。これからの大学生活では、教室の中だけでなく至るところで多様な学びの機会があなたたちを待っています。知識を得るためだけでなく、他者に寄り添い、社会に良い影響を与える国際人になるためにここにいることを忘れないでください」と述べた。

上智大学後援会会長の米澤実氏から祝辞が贈られた後、最後は校歌斉唱で閉式した。



式辞を述べる曄道学長



卒業生代表の葛西華さん



祝辞を贈るアガスティン理事長



新入生代表のエリゼンダ・サンナさん

日本初の模擬アフリカ連合会議

日本とアフリカの学生らがチームを組んで政策立案に挑戦

8月23日、本学は日本初となる「模擬アフリカ連合会議(模擬AU会議)」を開催した。この会議は、日本の若者にアフリカへの理解を深めてもらうことを目的に、アフリカ連合(AU)加盟国の協議を学生が各国代表に扮して体験するもので、国際協力機構(JICA)や国連開発計画(UNDP)と本学が共催。来年のアフリカ開発会議(TICAD)



自国の方針を確認しながら議論に臨む

を前に、8月下旬に東京で実施されたTICAD閣僚会合のテーマ別イベントのひとつとして実施された。

模擬AU会議では、2~3人の学生が各国の代表団を形成する。各代表団にはアフリカからの留学生がメンターとして参加し、在京大使館からも助言が行われた。本学からは7人の学生が大使役として参加し、12人の学生が会



本学の学生で構成されたラポルトツールたちは通訳や議事録作成で大活躍

議運営をサポートする「ラポルトツール」役を担った。ラポルトツールを務めた学生たちは、元国連広報官で本学国際協力人材育成センター所長の植木安弘特任教授から事前に指導を受け、決議案作成のための議事録作成や、通訳として留学生と日本人学生の議論をサポートするなど、会議運営に貢献した。

当日は、午前のセッションを四谷キャンパスで、午後の本会議をホテルニューオータニで開催した。本会議では、各国代表団がグリーンエコノミーや気候変動などについて議論。各国の利害がぶつかる中、何度も折衝を重ねて作成された決議案は、賛成多数で採択され、会場からは大きな歓声と拍手が上がった。閉会式の最後には、伊呂



日本の学生と留学生らあわせて約130人が参加した

原隆学務担当副学長が登壇し、白熱の議論を展開した参加者の健闘を称えて会議を締めくくった。

赤道ギニア代表として参加した久保ジャネット珠希さん(総グ2)は、「今回大使になりきること、普段の勉強だけでは知り得ない、他国との関係や担当国が有する課題などを具体化することができた。全国からアフリカに関心のある学生や留学生が集まったことで、議題に対する視野を広げつつ仲を深めることができ、非常に有意義な一日となった」と振り返った。

2024年度 科学研究費助成事業採択結果

補助総額は約3億7千万円

本学における令和6年度科学研究費助成事業(科研費)の採択状況は、9月10日現在、新規採択課題と前年度からの継続課題をあわせて、265件(前年度277件)となった。補助総額は約3億7千2百万円。

科研費はわが国の学術を振興するため、人文・社会科学・自然科学など全ての分野を対象とし、基礎から応用までのあらゆる独創的・先駆的な学術研究を発展させることを目的とする競争的研究資金である。専門分野の近い複数の研究者による公正で透明性の高い審査・評価システム(ピア・レビュー)を経て、配分が決定される。

研究種目などによって採択期間や助成額は異なり、採択期間は1年から6年となる。

今年度は、新規に76件(前年度63件)の課題が採択となり、その補助総

額は約1億6千5百万円(前年度より約3千6百万円増)であった。

今年度全体の採択率は35.6%で昨年度より2%増える結果となった。大型種目の新規採択については別表のとおり。

種目別の採択においては、挑戦的研究(開拓)に本学で初めて採択されたことは注目すべき点である。本種目は採択率が10%程度と低く、これまでの学術の体系や方向を大きく変革・転換させ、飛躍的に発展する潜在性を有する課題が採択される種目であり、今後の研究成果が期待されている。

また、研究活動スタート支援については、昨年度の採択率22.2%から40%へ上昇した。

昨今の社会情勢から、研究活動を行ううえで、外部資金の獲得は必要不可欠となっている。新型コロナウイルス

の感染拡大による研究活動の停滞に伴い期間延長された研究課題も、その多くが終了時期を迎えている。引き続き、採択経験を積んだ研究者の大型種目へのステップアップと若手研究者の採択に向けた支援の強化が、今後の科研費補助の増加につながると考えられる。

令和3年度に開始し研究者から一定の評価を得ている科研費申請支援事業者によるレビューサービスに加え、今年度の申請からは研究推進センターに新たに加わったURAチームによるレビューサービスも開始した。本学では今後もより一層、科研費の採択に向けた支援体制を整えていく。

(別表)令和6年度科学研究費助成事業「新規」採択研究課題(抜粋)

学部・学科名	職名	研究代表者	研究課題名
◆挑戦的研究(開拓)(3~6年間で500万円~2000万円の研究費が配分される これまでの学術の体系や方向を大きく変革・転換させることを志向し、飛躍的に発展する潜在性を有する研究)			
理工学部 機能創造理工学科	教授	高井 健一	水素脆化破面の局所領域における格子欠陥検出技術の開拓と新たな水素脆化理論への展開
◆基礎研究B(3~5年間で500万円~2000万円の研究費が配分される独創的・先駆的な研究)			
経済学部 経済学科	教授	蓬田 守弘	気候政策と国際貿易の国際協調に資する国境炭素調整措置の制度設計
経済学部 経済学科	准教授	樋口 裕城	歴史的データとサーベイ実験を用いた商業集積の発展に関する実証研究
理工学部 機能創造理工学科	教授	江馬 一弘	2次元ハイブリッド物質における多重量子井戸ポラリトン:2次元と3次元を繋ぐ光学応答
理工学部 物質生命理工学科	教授	竹岡 裕子	高耐久性ペロブスカイト太陽電池に向けたπ共役系ホール輸送材料の開発
理工学部 機能創造理工学科	教授	菊池 昭彦	InGaN系フォトニック結晶を用いる可視域トポロジカル面発光レーザーの開発
総合人間科学部 社会学科	教授	今井 順	資本主義的労働社会のサステナビリティプラットフォーム・ワーク拡大の総合的研究
文学部 新聞学科	教授	佐藤 卓己	歴史対話を可能にする「東アジア現代メディア史」に向けた国際連携研究

MIRAI 第3フェーズ
キックオフイベント開催
日本・スウェーデンの
学術研究交流プロジェクト

「MIRAI」は、2017年に発足した日本とスウェーデン間の学術交流促進を目的とした大学間連携プロジェクトで、現在は本学を含む17大学がメンバーとなっている。

2024年からプロジェクトの第3フェーズが開始。9月4日にオンラインでのキックオフイベントが行われ、200人以上が参加した。

イベントの前半では、スウェーデン側からストックホルム環境研究所のディレクター、日本からはANAホールディングス株式会社のB777の機長がそれぞれサステナビリティをテーマとする基調講演を行った。

さらに第3フェーズでスタートした4つのGlobal Challenge Team(GCT)では、日本、スウェーデンの共同議長が登壇し、各チームの活動予定等につ



オンラインイベントで発表する
藤田正博教授

いて発表を行った。本学からは、GCTの1つであるMaterials for Energy Conversion and Storageの共同議長を務める理工学部物質生命理工学科の藤田正博教授が登壇、発表を行い、両国で持続可能な社会のための技術開発に資する様々なテーマを扱うことを掲げた。

MIRAI 第3フェーズでは、これまでの参加大学間の連携強化と研究の進展をふまえ、研究成果の社会還元を進めることを目標としている。本学は引き続きMIRAIへの参加を通じて本学の強みを活かした研究を推進し、グローバル社会の課題解決のための取り組みを進めていく。

香港中文大との連携講座

香港・東京を舞台に経営課題の解決に挑む

8月12日から約2週間にわたって、協定校の香港中文大学との連携講座が実施され、本学の学生6人と、香港中文大学で観光学やホテル経営学を学ぶ学生6人の計12人が参加した。“Design Tomorrow's Retail Customer Experience(小売顧客体験の新たなデザイン)”をテーマに、両校の学生が混成グループを編成。ビジネスの最前線で活躍する実務家らのレクチャーなどを経て、グループごとに最終提言を取りまとめた。

香港で実施されたプログラム前半では、香港中文大学の教員による小売業に関する講義、在香港日本総領事の公邸にて岡田健一大使との懇談、現地商業施設の視察やその経営戦略の調査などが行われ、世界有数の競争力を有する香港経済のダイナミズムを肌身で感じ取った。

後半では、学生達は東京に移動。香港との相違点や共通点を念頭に置きながら商業施設を視察したうえで、自身の専門的知見を交えながらグループで議論を行い、最終提言に向けて内容を練り上げていった。

8月21日には、首都圏を中心に百貨店や商業施設を展開する株式会社丸井



互いの専攻分野の知見を活かしながら
発表に挑んだ

グループで執行役員を務める石岡治郎氏が、同社が標榜する「売らない店」づくりのビジネスモデルを解説。顧客に体験価値を提供することで収益を上げる同社の経営戦略に、学生たちは感心しながら耳を傾けた。

最終日はこれまでの総括として、六本木ヒルズ森タワーや池袋のサンシャインシティなど、東京を代表する商業施設の調査・分析を行い、経営課題解決の提言を行った。

本プログラムのコーディネーターを務めた経済学部経営学科の網倉久永教授は、「2019年以来、5年ぶりに東京・香港を相互に訪問することができた。過去4年間オンライン形式を取り入れてきたが、現地に足を運び、現物に触れることではじめて得られる気づきや学びはかけがえないものであることを再確認した」と振り返った。

Sophia Open Research Weeks 2024

11月5日(火)~24日(日)

上智大学では、研究所・センター等の研究成果の発信の場として、毎年Sophia Open Research Weeks(SORW)を開催し、講演会やシンポジウムを通じて様々な研究活動を紹介しています。本学の研究機構や附属研究機関の研究所・センターを中心として、期間中20以上の企画を実施し、幅広いテーマを取り扱います。

今年度は11月5日~24日に開催予定で、学内外を問わず、高校生や一般の方にも広く公開しておりますのでぜひご参加ください。詳細情報は、本学公式サイト(SORWページ)で、10月中旬以降に順次公開予定です。



第22回 上智大学国連Weeks, October 2024

10月8日(火)~24日(木)

10/8(火)【講演会】	SDGsに貢献する先端化学技術
10/15(火)【講演会】	ガザの新たな平和と復興~国連事務次長補を招いて~
10/17(木)【シンポジウム】	戦争犯罪と人権の保護
10/18(金)【シンポジウム】	自治体・企業の地域規模の気候変動問題への取り組み:地域開発・発展及び社会的課題とのインターリンケージ
10/21(月)【講演会・ワークショップ】	国際機関・国際協力キャリア・ワークショップ
10/23(水)【シンポジウム】	世界遺産:平和で持続可能な社会へ
10/24(木)【シンポジウム】	国連デー企画:国連事務総長メッセージ+「人道支援におけるイノベーション:なぜ必要か、誰のためか」

写真パネル展(場所:四谷キャンパス2号館1階エントランス)

10/8(火)~24(木) 世界遺産のモノローグ

*各イベントの詳細および参加申込みは、右のQRコードからご確認ください。



寄贈作品を多数展示

10月18日まで開催

まりあ 鞠安日出子 イコン・日本画-生きるカー

日本における数少ないイコン・日本画の作家の中で、突出した才能を発揮する鞠安日出子氏の展示会を、10月18日まで四谷キャンパス2号館1階で開催中。イコンは、ギリシア語の「肖像」、「似姿」、「イメージ」を意味する「エイコーン」が語源。主として東方正教会で崇拝されている板絵の聖画像のことを指し、キリスト、聖母、聖人や聖書の場面が描かれたものなどで構成されている。今回の展示会は、本学の創立に関わる歴史的背景をもと

に、キリスト教と日本文化の融合を感じることができる内容となっている。



鞠安氏から上智学院へ寄贈された
作品を展示



開催情報はこちら

2024年度春学期

海外留学プログラムの実施状況

本学では、海外大学との交換留学・学術交流を推進するため、積極的な協定校との連携に取り組み、留学制度の充実を図って世界中に学生を派遣、また世界中から留学生を受け入れている。派遣については、学生への安全管理指導をはじめ、大学として学生の海外派遣にかかる危機管理体制を整えたうえでのプログラム実施を徹底している。

交換留学では、24年春秋合わせて約350人の学生を35カ国に派遣した。地域別の学生数については、協定校数の最も多いヨーロッパが最多で、19カ国で約170人が留学している。また、昨今の円安や物価高騰の影響を受け、経済的な負担を軽減できるアジア地域への関心も高まり、9カ国で約35人の学生が学んでいる。

さらに、スイスのGeneva Graduate Institute (GI) との3+2プログラムで

は、2人の学生が、交換留学生としてGIでの修士1年目を開始し、また、本学の推薦をもって提携大学に出願できる海外大学院特別進学制度を利用した本学卒業生2人が、この秋学期より米国コロンビア大学大学院に進学した。

他方、留学生の受け入れについては、春学期に36カ国から渡日した472人が在籍し学修に励む傍ら、在学生からなる交換留学生サポーターとの交流や、英語落語、明治神宮参拝ツアーなどの日本文化体験を楽しんだ。8月に開催されたオープンキャンパスでは、「上智大学にきている留学生と話してみよう」の企画に参加し、英語のみなら

ず、本学で学習したばかりの日本語を使い、来場した受験生との対話に臨む姿も見られた。春学期終了をもって一部の学生は帰国したが、継続して在籍する留学生に加え、秋学期には新たに36カ国から366人を受け入れる予定だ。

海外短期留学プログラムにおいては、23年から全面的に渡航を再開した。24年夏期休暇中は海外短期語学講座11件、海外短期研修6件、実践型プログラム6件に計307人が参加した。また、就業・実務体験を通じて、グローバル社会の中でどのように大学での学修成果を活用するかを学ぶ、グローバル・インターンシップ科目の実習先



オープンキャンパスの企画では留学生が活躍した

27件に、計46人の学生が参加した。グローバル教育センターでは、グローバルな学びの更なる促進のため、様々なプログラムの提供や多方面での支援を続ける。一方、世界情勢は常に不安定であるため、留学希望者は、引き続き日本および滞在予定国の感染症や治安面のリスク、自身の語学力や危機管理対応能力の有無も慎重に見極めながら留学計画を立てることが不可欠との自覚を持ったうえで、多様な留学機会に積極的にチャレンジしてほしい。

サマーセッション開催

37の国と地域から159人が参加

6月28日から7月19日の間、海外学生向け短期プログラムSummer Session in East Asian Studies2024を実施した。

24年度は37の国と地域から159人の参加があり、日本の文化、社会、経済、歴史などに関する13科目と日本語基礎コースの計5科目が開講された。日本文化体験イベントでは、茶道体験、明治神宮参拝、寿司作り等を体験し、有意義な機会となった。プログラム終了後のアンケート回答では、「忘れがたい一生ものの経験ができた」、「講義の質が高かった」、「期待以上の素晴らしい体験ができた」など多



例年人気のポップカルチャーのクラス数の声があり、好評のうちに幕を閉じた。

同様に海外学生向けに1月に開催するJanuary Session in Japanese Studiesについても、対面による実施を予定している。

グローバル教育センターからののお知らせ

【2026年春期休暇以降のプログラム募集について】

交換留学は10月3日に25年秋の渡航開始分の学内選考願書受付を終了した。今後、11月、12月の学内選考を経て、年内に派遣学生を決定予定。25年2月、3月(春期休暇中)の海外短期プログラムは、10月中旬に各プログラムの説明会(対面)を実施、10月、11月に申込受付を行う。申込を希望する学生は、説明会出席のうえ、参加を検討のこと。次年度実施プログラムについては、25年4月頃に公開される募集要項を確認すること。

グローバル教育センターからの情報

は、Loyola掲示板を「留学」で検索すると確認できる。大学プログラムのお知らせをはじめ、海外の協定校からオンライン講座(上智での単位はなし、無料/有料)や、オンラインでの学生交流機会の案内等がある場合も、随時Loyola掲示板で案内している。グローバルな学びに興味のある学生は、ぜひ定期的な確認を。

【留学カウンセリング】

本学では常駐の留学カウンセラーが留学に興味のある学生を対象にカウンセリングを実施している。1枠あたり30分の完全予約制で、本学学生なら誰でも利用可能。大学の制度に関する質問のほか、将来の留学に向けた疑問点や留学全般の相談も可能なので、積極的に活用してほしい。



留学カウンセリングについてはこちら

体験談 交換留学

「イギリス・エディンバラ大学」
山本 凜々花(総グ4)

初めての留学であるエディンバラ大学での経験は、学業面において最も厳しい挑戦でしたが、同時に人生の転機とも言える貴重な体験となりました。

留学当初は、英語でのタスク処理能力の不足や、日本語と英語の論文作法の違いに直面し、非常に苦労したため、友人や教授からの助言を仰ぎつつ、愚直に課題をこなしました。結果として、春学期には、心に余裕が生まれ、論理的な文章を作成する力が向上し、納得のいく成績を収めることができました。この過程を通じて、困難を乗り越える気力が自己成長に繋がることを深く実感しました。

また、学業以外の活動として、Salsa Societyに参加し、ラテンダンスを学ぶ機会を得ました。これにより、学年や国籍、職業、年齢を超えた多様な人々との交流が生まれ、視野が大きく広がりました。この活動は、単に学業のストレスを和らげるだけでなく、一生の友人を得る機会にもなりました。異文化や新たな挑戦に対してオープンであることの重要性を、この経験から学びました。

今後は、この留学で得た学問的知見を卒業論文に活かし、悔いのない成果物を制作したいです。また、留学で培った多様な視点をもとに、住みよい社会実現の道を模索していきたいです。



体験談 実践型プログラム

「インドの社会経済・人間開発に学ぶ」
原田 想大(経営3)

24年度春学期の実践型プログラム「インドの社会経済・人間開発に学ぶ：南インドのケララ州を事例に」に参加しました。

ケララ州は、収入が比較的少ないにもかかわらず、インドで高水準の人間開発を達成した州です。この開発モデルを中心に、座学とフィールドワークを通じ、医療や教育、ジェンダーなど多角的な視野からケララの人間開発について理解を深めました。

特に印象に残ったのが、ケララの方権化についてです。村で草の根レベルの意見をまとめて上位の行政に反映するシステムが、多様なバックグラウンドを持つ住民を取り残さずまとめる役割を果たしていると感じました。

プログラム前半と後半の最終日には、各々の担当テーマについてプレゼンテーションを行い、学習の成果を発表しました。日印の比較を行うことで、現地の教授や学生に日本のことを教えるのみならず、私たちの社会における課題点を改めて見出す機会となりました。

また、現地学生との交流も非常に有意義な体験になりました。フィールドワーク後の意見交換や、日本との共通点や相違点を話すなかで双方で知識を深め合うことができました。

今回の経験を活かして、将来は海外とのビジネスの現場をつなぐ人材になりたいと考えています。



体験談 3+2プログラム

「スイス・Graduate Institute」
シナバーガー 英利佳(23年国教卒)

Geneva Graduate Institute (GI) が2022年に新設した「国際関係開発学」の修士過程で、グローバルヘルス(国際保健学)を専攻しました。WHOをはじめとした国際保健関連機関の中核であるジュネーブでは、学内外でイベントやワークショップが日々開催され、机上での学びだけでなく、実務者の視点や多様な考え方を知る機会にも恵まれました。

プログラムの一環であるApplied Research Projectでは、都市部における感染症抑制と緊急時の対応力向上に関する政策をUN Habitatと共に提言し、また、学内の国際保健センターでは、治療薬のイノベーションとアクセス双方の改善に向けた研究を行いました。同センターでは、学内のイベントの他、外交官や国際機関職員を対象とした国際保健外交セミナーの企画・運営にも携わり、日本の国際保健外交戦略に焦点を当てた修士論文の執筆に大いに役立ちました。

人間の生活基盤である保健分野、特に国際保健の専門家になるというキャリア目標がこの2年で明確になり、大学院在学中のご縁や巡り合わせもあいまって、卒業後は国際保健センターの正規職員として採用されました。これからは保健と政治・外交を結ぶプロフェッショナルを目指して邁進し続けたいと思います。



キャリアセンター主催 キャリアを考えるイベント開催 卒業生社員やグローバル企業との出会いの場に

キャリアセンターでは、9月25日にOB・OG訪問会を、翌26日には英語キャリアフェアを行った。

■OB・OG訪問会

訪問会は、就職活動における選考対策ではなく、様々な部門で活躍しているOB・OGとの交流を通して、自身のキャリアを考える機会とすることを目的としている。今回は、卒業生が多く所属する24社を招き、学部3年生だけでなく、1・2年生も含め、延べ約250人が参加した。

会場では「大学での学びが仕事でどのように活かされているか」や「海外で働く際に意識すべきことはどのようなことか」といった質問が学生から投げかけられ、OB・OGとの活発なコミュニケーションの様子が見られた。

参加した学生からは、「上智の先輩だからこそ、親近感を持って質問がしやすかった。自分も同じ上智大生としてOB・OGの方のように頑張れば憧れの企業に入れる気がして、前向きになれた」、「これまであまり関心のなかった企業や業界の魅力に気づくことができた」などの感想があり、それぞれがキャリアを考える良い機会となった。

■English Career Fair

キャリアセンターガイダンス一覧(抜粋)

開催日	開始時刻	終了時刻	名称	開催場所
10月8日～11月7日	12:45	13:20	内定者アドバイス会(計6回)	6-301 (10月17日は6-304)
10月10日	15:30	18:00	OBOG交流会	図書館
10月11日～11月22日	17:20	19:00	総合就職ガイダンス(計3回)	6-301+Zoom LIVE配信
10月15日～12月10日	12:45	13:20	留学生対象 総合就職ガイダンス(計5回)	6-205+Zoom LIVE配信
10月18日	17:20	18:10	25卒生対象 新卒求人セミナー	Zoom LIVE配信
10月23日～10月30日	12:45	13:20	留学前後支援 内定者アドバイス会(計3回)	6-301
10月24日～11月14日	17:20	18:50	【学部1・2年生対象】就活準備ガイダンス(計2回)	6-301
10月25日	12:40	19:00	技術系OBOG交流会～学びとキャリアをつなぐ～	2-17階
11月6日～12月5日	12:45	13:20	『公務員研究シリーズ』業務説明会(計5回)	6-301
11月14日	12:45	13:20	この秋から始める就職活動の進め方	6-301+Zoom LIVE配信

※上記は主なものになります。その他イベントを含む最新情報・詳細はWEBキャリアセンターのガイダンス情報をご確認ください。(「Loyola」>就職・キャリア支援>webキャリアセンターはこちらから→ガイダンスを探す)より)



5年ぶり対面開催のEnglish Career Fair

英語によるキャリアフェアは、テンプル大学ジャパンキャンパスとの共催で今回が12回目。本学2号館17階を会場とし、コロナによる自粛明け初の対面開催となった。対象は、主に2025年秋から26年春卒業予定の外国人留学生と、高い語学力を持つ日本人学生。両大学には日本語能力が十分ではないが、日本での就職を希望する留学生が多く在籍している。他方、入社前に流暢な日本語を話すことができなかったという優良企業も多く、当フェアは、そういった学生と企業の出会いの場となっている。

当日は企業11社、学生が約300人参加。企業概要紹介の後、各社のブースに分かれ、学生は企業と活発なコミュニケーションを取り、今後のキャリアを考えるヒントを得ていた。

ひと

水球2年連続リーグ得点王 個人の強みをいかしたチーム作りで優勝狙う

体育会水泳部水球部門に所属し、2年連続リーグ得点王に輝いた園田麟太郎さん(法学部法律学科3年)。水球というスポーツと向き合うことで感じた自分自身の変化、そしてチームを率いる主将としての胸の内を語った。

4歳からスイミングを習っていた園田さんが水球に出会ったのは10歳のころ。「プールの中でボール遊びをするくらいの感覚で、最初はとても楽しかったのを覚えています」。ルールを覚え始めると、水面下での駆け引きや多彩なチームワークなど、小学生ながらにその戦略性の高さ魅了されていった。

「スイミングをしていたころは、どちらかという内向きでした。□数も少なく、黙々と自己ベスト更新に向けて自分自身と戦っていました。一方、水球はチームで戦うスポーツで、仲間とのコミュニケーションが自然と多くなる。これが自分自身の転換点になったと思っています」

チームとして勝つ喜びや負ける悔しさを味わうなかで、仲間を鼓舞し、時には感情をむき出しにすることもあった。「水中の格闘技」とも呼ばれるほど激しいこのスポーツで、相手を打ち負かすために仲間とぶつかることも度々あった。だが、この経験があったからこそ「自分た



園田麟太郎さん

ちならでできる」という自信や、周囲を見渡す視野の広さも身に付いた。2年連続リーグ得点王という輝かしい成績も、園田さんにとっては手放しでは喜べないという。「現状、チームとしての得点パターンに偏りが出てしまっています。攻め方の幅を広げないとチーム全体として成長は望めないし、自分が卒部する時にチームに置き土産をどれだけ残せるかということも、自分の責務だと思っています」

「水球は大学から始める人も多く、水泳、野球、ハンドボールなどの経験者が毎年入部してくれます。水球経験者と未経験者がうまく調和し、全体の底上げができるよう知恵を絞る日々です。プレーヤーの個性や強みを活かしながら戦術の幅を広げることができれば、リーグ優勝も夢ではないと思っています」

第78回ソフィア祭

11月1日～4日に開催

今年で78回目を迎えるソフィア祭(学園祭)が、11月1日から4日にかけて開催される。今年のテーマは「VIVID」。ソフィア祭に関わるすべての方一人ひとりの個性という色が、生き生きと、鮮やかに描かれてほしい。そして、ソフィア祭が終わった後でも、思い出が鮮明なまま記憶に刻まれ続けて欲しい」という想いが込められている。

ソフィア祭は、1日の「前夜祭」と2～4日の「本祭」と呼ばれる期間に分けられている。前夜祭の目玉であるライブステージでは、ロックバンドのmoon dropをゲストに招き、ソフィア祭限定の特別ライブを実施する。

2日目からは、学園祭のメインとなる模擬店や教室企画、ステージでのパフォーマンスが開始される。学生の日々の活動の成果や、上智の持つエネルギーを直に感じられるはずだ。

3日目には、従来のミス・ミスターソフィアコンテストから2020年にリニューアルした「Sophian's Contest」が行われる。性別などにとらわれない「開かれたコンテスト」として、多くのメディアの注目を集めている。また、同日のゲストトークショーではタレントのローランド氏が登壇する。

4日の最終日には、上智大生の中に埋もれた才能を発掘する企画、「Sophian's got talent(SGT)」を開催。審査員には、現役上智大生のモデル大峰ユリホさんが参加する。

実行委員会は、これまでマニュアル



実行委員長の上坂瑞さん

にはないさまざまなトラブルに直面しながら、臨機応変な対応で乗り越えてきた。ソフィア祭実行委員長の上坂瑞さん(総社3)は、「昨年12月の発足から、2人の副委員長と中心になって準備を進めてきました。楽しいことも苦しいこともたくさんありましたが、なんとかソフィア祭を形にするに至りました。いざ本祭を迎えれば、主役となるのは参加団体、ご来場者の皆様です。私たち207人のこだわりと想いが詰まったソフィア祭を心の底から楽しんでいただければ、これ以上の喜びはないです。メンバーが一つひとつ手作りしたタペストリーや横断幕、看板などの装飾品にも是非注目してください。四谷キャンパスでお待ちしています！」と意気込みを語る。

詳細はウェブサイトから。



ソフィア祭2024のロゴ

企画展「上智を知るならここからスタート!」

SOPHIA OPEN CAMPUS 2024で大盛況

8月2日および3日、高校生を主な対象に行われたSOPHIA OPEN CAMPUS 2024の企画として、図書館9階のソフィア・アーカイブズの展示エリアにおいて「上智を知るならここからスタート!」が行われ、2日間で延べ約1000人が来場した。

このイベントは初実施で、予約不要・入退場自由という参加しやすさもあり、説明会や体験授業などの合間に来場する高校生や保護者も多く見られた。

来場者の中には、上智がカトリックの大学であることやローマ教皇と密接な関係をもっていること、そして学院が中高4校を設置しているということを知り、初めて知る方もいた。また、イエズス会や紀尾井町という場所の歴史に関心を持つ方も多く、もともと上智が男子校だったことや学内でも大学紛争があったことに驚く声もあった。

ソフィア・アーカイブズの職員は、「単に見るだけの展示とならないよう、豆知識を掲載し、立ち止まって考えてもらえるような構成にした。ま



大賑わいのソフィア・アーカイブズ展示室



かつて学生証に使われていた割印体験が人気で、ウェルカムカードに割印(かつて学生証で使用していたもの)を自由に押せるコーナーは大人気で、説明会やキャンパスツアーでは得ることのできない『上智の原点』や『上智のここから』を体感してもらえたのでは」と企画を振り返った。